

THE YMC&A

日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学びつつ世界のYMCAとのつながりのなかで、次の使命を担います。

私たちは、すべての人びとが生涯をととして全人的に成長することを願い、すべてのいのちをかけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、一人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、喜びを共にし痛みを分かちあう社会をめざします。

私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。

2014年11月1日発行 (毎月1日発行)
昭和22年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円(外税) (送料62円)
発行/公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区本塩町7
TEL: 03-5367-6640 FAX: 03-5367-6641
URL: <http://www.ymcajapan.org/>
発行人/島田 茂 編集人/山根 一毅
印刷/あかつき印刷株式会社

変革をもたらす大胆なリーダーシップ

世界YMCA/YWCA合同祈祷週 2014年11月9日(日)~15日(土)

今年度のテーマは、出エジプト記に見る、「変革をもたらす大胆なリーダーシップ」です。

聖書は変革をもたらす大胆な指導者たちの物語に溢れています。そのような指導者たちの中でもモーセはその指導力の広範性において、最も優れた指導者の一人として極めて異例な存在です。しかしモーセは自力で成功した指導者ではなく、モーセの誕生から死まで、指導者として人格を形成していく段階で、さまざまな人びとが関わっています。

この1週間、私たちはモーセの、変革をもたらす大胆なリーダーシップの基盤を作り上げた女性たちに焦点をあてます。モーセは女性に救出され、養われたことによって、身をもって女性が直面する課題と抑圧を認識することとなったのでしょう。その結果、モーセは後に彼がエジプトから率いることとなる女性を含む民たちを苦しめたあらゆる圧制に進んで抵抗しました。

私たちがこの1週間で共有する物語は、人生における大きな危険や恐怖について、また、それらに直面してなお、歴史の流れを変えるために行動する個人の力について語り掛けます。恐怖は不安を生み出し、私たちは恐れの対象を破壊しようと思いがちです。ファラオはヘブライ人を恐れていました。恐らくファラオは自分の地位が神に承認されていないのではないかと疑っていたのでしょう。ファラオは弱さを実感しました。そして彼の地位と権力に挑戦、または侵害する可能性のある者は、誰でも破壊しようと思いました。

ただ、ファラオの支配下の人びとは王の命令が抑圧的で間違っていると分かっていたにもかかわらず、ファラオへの恐怖心から自分の生命と地位を守るために王の命令に従って行動していました。このような不正義に対して私たちはどのような行動を取るのでしょうか。一方、助産師の女性たちは、ヘブライ人であっても生まれてくる命を尊重し、ファラオを一人の人間として捉え、人間であるファラオよりも神への畏れを表明しました。彼女たちの信仰が、ファラオに挑む力を与え、彼女たちの決断力は歴史の流れを変えて変革をもたらしました。彼女たちが助け出した赤ん坊はヘブライ人をエジプトから導き出す運命に定められた人物だったのです。

神は影響力や富を持つ女性たちではなく、「普通の」助産師の女性たちを用いられました。彼女たちは無名で身元も分からない女性たちですが、世界を変え、人類の歴史の流れを変えました。神の働きを担うのに小さすぎる者はい

せん。私たちが正しいことをしており、神の意志を行っている分かっているならば、現状に挑戦し、大胆に変革をもたらす決断ができる強さと勇気が与えられます。

今、YMCAとYWCAは青年と女性のエンパワメントに力を注いでいます。その使命と立場を確固とするリーダーだけが、他者を本当にエンパワーすることができます。しかし、脅威や不安を感じているとき、安全が保証されていないと思うときに、自らの力や権力そしてリーダーシップに対して誰かをエンパワーすることは困難です。むしろ、どんな手段を講じてでも身近な脅威を抹殺しようと思ひます。

ファラオの娘の物語は、一人が態度を決め正しいことをする決断をすると、他の人びとが進んで従い支援することを実証しています。時には、たった一人から運動のすべてが始まることを私たちに思い出させます。私たちは喜んで大胆な一歩を踏み出す者となれるのでしょうか。正しいことをするために、あえて異なる者となり、権力に挑み、王に真っ向から抵抗する者となれるのでしょうか。行動するためには人びとの共同による力が必要であることは明白です。出エジプト記に登場する女性たちは、それぞれが異なる役割を持っていますが、モーセの命を救い、彼が将来変革をもたらす大胆なリーダーとなることを可能にし、またその使命と神の目的を成就するという共通の目的と価値観において一致しています。

私たちはこの1週間、機知に富んだ大きな変化を生み出すためにリスクを恐れず変革をもたらす一人ひとりのリーダーシップを覚え賞賛します。100年以上にわたりYMCAとYWCAの運動は、そのようなリーダーとなる女性や男性、また青年を育み、守り、闘い、そして彼・彼女たちに声を上げる機会を与えてきました。個人やコミュニティの尊厳を陥れる現状にどのように反対する立場を取ることができるか考えつつ、今年の合同祈祷週を読んでいただきたいと思ひます。この合同祈祷週が、大胆に不正義に立ち上がるように皆さんを導きますように。この世界は本当にもっと多くの英雄を必要としています。

(合同祈祷週・あいさつ文一部抜粋)

世界YMCA会長 デボラ・トーマス＝オースティン
世界YMCA同盟会長 ピーター・ポスター

*合同祈祷週は、1901年より全世界のYMCA、YWCAに連なる人たちが、毎年一つのテーマのもとに、聖書からメッセージを聴き、祈りを共にする時として定めています。

ラポール

相手と向き合って心を合わせていくこと。
(仏教: 縁和・共感の関係を築く)

「鉄は鉄をもって研磨する。人はその友によって研磨される。(箴言27章17節)」という聖書の御言葉があります。その通りだと思います。これまでの歩みを振り返ってみると、自分が大きく変えられた時、大きく成長した時に良き友が与えられていたことに気付かされます。故郷を遠く離れた今でも、友の一人ひとりの名前と顔を思い起こしながら、皆の平安を教会の牧師室で祈っています。

良き友と出会い、良好な関係を築くことは一人の人間がより豊かに成長するために必要な要素の一つだと思います。しかし、友との関わりは良いことだけでは限りません。何か小さな出来事をきっかけに関係が悪くなることもしばしばあります。良き友であったが故に、一度崩れた関係を修復することは難しく、良き友であったが故に、その友を失った時の傷は深いのです。結局、和解できずに離ればなれになった友もいます。そのような痛みを伴う経験を繰り返すうちに、友との関わりを遠ざけてしまうこともあるでしょう。良き友を得ることはなかなか難しいのです。

現代はさまざまなコミュニケーションツールの登場により、手軽で容易に人間関係を築けるようになりました。上手に使いこなせる人にとっては便利なツールであり、それこそ良き友との関係を築く有効な手段の一つなのでしょう。こういった現代的な人間関係のあり方に否定的な意見もあるかもしれませんが、人が人を求め、友を必要とすることへの本質に変わりはありません。重要なのは良き友と出会い、良き友を知る“方法や手段”ではなく、良き友が“誰であるか”を知ることだと思ひます。

「友の振りをする友もあり、兄弟よりも愛し、親密になる人もある。(箴言18章24節)」という聖書の御言葉があります。聖書は明確に、私たちに決定的な良き友を紹介しています。もちろん、それは主イエス・キリストです。主イエスは私たち一人ひとりにふさわしく寄り添い、守り導き、「研磨」してくださいませ。そして、このお方は決して私たちを見捨てません。だからこそ、私は一人の牧師として皆さんに紹介したいのです。「主イエス・キリストこそ唯一無二のあなたの良き友です」と。

あなたの良き友は…

日本基督教団 東和歌山教会 牧師 阿部 倫太郎

Vol.4

We All Belong to YMCA

YMCAの活動に参加するユースからの発信

◆神戸女学院大学YMCA

◆活動内容：2009年に再興し、学内サークルとして活動。31人が所属し、エコキャップ運動や東北被災地支援ボランティア、近隣大学YMCAとの合同聖書研究会などを行う。

私は、国立ハンセン病療養所での学習プログラムに参加し、ハンセン病への偏見による差別について学ぶ仲間に出会ったことがきっかけで、学生YMCAに入学しました。その後、学生YMCAを通じて、東京YMCA石巻センターでの被災地支援ボランティアに参加しました。児童クラブや仮設住宅で被災地の方々や交流を重ねる中で、「今年も会えてうれしい。また来年も会おうね」と言葉が掛けられました。それは、これまで自分が誰かの役に立つことがあるなんて思いもしなかった私にとって、自分の存在を見つめ直す大きな経験となりました。



左が赤松さん

その他にも、夏期ゼミナールで以前から関心のあったジェンダーについて考え、再び参加したハンセン病療養所訪問プログラムでは、当時の日本政府が行った隔離政策や差別の歴史を知り、差別意識を自身に問うきっかけとなりました。学生YMCAの活動はいつも、私に刺激を与えてくれます。さまざまな背景を持った人たちの出会い、一人ひとりの思いや言葉が尊重される場、そして自己を見つめ直す経験を、これからの学生生活の糧にしていきたいです。

赤松 花甫里

富山YMCAフリースクール

にぎやかで、パワー溢れる場所

◆富山YMCAフリースクール所長 上村 香野子

「普通のことがない」「不安で寝られない」「薬が手放せない」。夜、駆け込んでくるみんなの悩みは深刻です。悩める若者と関わって、早20年。もう思い出せないほどたくさん、でもそれぞれが個性豊かで、決して忘れられない子どもたちが、フリースクールを訪れ、ここから羽ばたいていきました。



新しい道程を見つけて、フリースクールを巣立つメンバーを送り出す卒業式。一人ひとりに手作りの卒業証書が手渡される

一人という気がしない

富山YMCAフリースクール生徒 久郷 綾音

私は18歳の春から富山YMCAのフリースクールに通い始めたが、依然として変わらないのは、基本的に一人であるということである。それでも「一人」の意味は大きく違う。学校や家では、孤独感や疎外感を感じていた。異空間にいるようで、心もとなかった。周りのことがよく見えてなかったと思う。その場しのぎの繕いはざらで、自分にも誰に対しても不誠実だった。急に気を張って、自分の気持ちを知られまいとしていた。YMCAでは、一人なのはごく自然なこと、気を張る必要もまったくなく、素直になれる。自分を出すまいとしていたのも忘れて、自分を知ってもらいたくなった。なんだか今まで自分に強いてきたことがどうでもよくなった。どこよりも誰よりも一人という気がしない。そうしているうちに、楽になった。繕いはざらで物足りない。外界とちゃんとつながった生きた人生を送りたいと思った。誠実に、でも力を抜いて。



子どもたちの「強さ」と「可能性」は、大人が思うよりもずっと大きくて、無限であるということ。彼らはみんな、心の中にエネルギーをたっぷりためた今どきの「普通」の若者たちで、今休んでいるように見えていたとしても、必ず動き出します。

ここはいつもにぎやかで、若者たちのパワーに溢れています。私は、そのパワーに圧倒されながら、また表に現れていない彼らのように大きなパワーを信じ、楽しみに待つ毎日からなかなか抜け出せません。

奈良YMCA心のフリースクール

出会い、認め合い、つながり合う

◆心のフリースクールカウンセラー 山田 静代

人の心の動きは豊かで複雑です。不登校という現象にはさまざまな学説や意見がありますが、奈良YMCAの「心のフリースクール」は、原因を一つに定めず、あくまでもどの子どもにも起こりうる現象として捉え、子どもたちに寄り添っています。



スクール生の自己表現の場の一つ、毎年恒例のクリスマスコンサートでは、ボランティアとの協働によるバンド演奏が披露される。「みんなであつたことに夢中になり、協力し、心が一つになる瞬間の感動を経験する」大切な一日

活動を楽しんでいます

奈良YMCA心のフリースクール ボランティア 北林 静江

心のフリースクールでボランティアを始めて14年になります。教職を退いて、自分にできるボランティアは何だろうと考えた結果の自然な選択でした。教員時代の体験からもっとしっかり不登校の生徒と向き合いたいという思いもありました。当初は子どもたちとどのように接したらいいのかを模索しながら、とにかく決めた曜日には休まずに通いました。そのうち名前を覚えてもらい、子どもの方から声を掛けてくれることも多くなり、活動を楽しんでいる自分自身に気がきました。子どもたちの変化は驚くばかりです。表情がなく、体育館の隅で丸くなっていたような子が、緩やかに変わって人前でバンド演奏などもしています。自分を取り戻して、進路のことを真剣に考えている姿を見ることは頼もしい限りです。いつのまにか「心のフリースクール」の支援団体、「ハートハース」の代表となり、週2日の活動を続けています。この場所でも多くのスクール生、スタッフ、ボランティアと出会い、交流を深めることができるのは、私にとっても本当にうれしいことです。



一戸建ての若者の居場所、libyの外観

「一人ひとりのことを大事にしよう」という設立当初から変わらないlibyの普遍的な精神があるとスタッフは話します。1998年に、主に不登校の子どものための居場所としてスタートしたliby (let it be at the YMCA of Tokyoの略)。その名称には、「一人ひとりがある人静かに過ごしたりなど、そのあり方、他者との距離の取り方はさまざまです。」「ここではみんな、いい意味で相手によって接し方、付き合い方を変えていきます。」「libyで若者と日々を過ごすスタッフについては、例えば不登校や適応障害は「問題行動」とされ、「元の状態に戻そうとする」働き掛けが周囲からなされます。しかし、人と人との関係は、本来一方向的な力関係によるものではなく、相互の歩み寄りによって成り立っていくものです。」「この人とはこういう付き合い方が心地良い、という感覚が自分にも相手にもあったらいい。型破りの行動も、相関関係の問題として捉えることで「問題行動」ではなく「個性」であると人々との関係性が世の中に広がっていくことで、社会は少しずつ変わっていくのかもしれない。」

(文責・編集部)

落ち着いて不登校もできない

東京YMCA liby専任講師 小倉 哲

肌寒いこの季節、風邪薬のCMがやたらと目に付きます。「早めの〇〇」「痛くなったら、すぐ〇〇」など、商品名と一緒にフレーズまでが浮かんできそう。疲労回復・体力増進をうたった栄養ドリンクのCMもよく見かけます。「休むことなかれ、立ち止まることなかれ」とあたかも追い立てられているような気分になります。こうしたCMには、今の社会の状況が如実に表れているように思います。ここでは、早期発見と早期治療、そして、アクセルを踏み続けることが奨励され、とどまることや気長に待つことは認められません。



YMCAのフリースクール

安心して集える若者の居場所

「一軒家という独特のスタイルで運営される若者の居場所、新しいオープンスペースlibyを訪ねてみました。」



ダイニングテーブルに集うメンバー。libyではほぼ毎日、キッチンで食事を作り、共に食卓を囲んでいる

「一人ひとりの「今」を大切に」

YMCAには、従来の学校から離れた、子どもや若者の「オルタナティブな居場所」としてのフリースクールやオープンスペースがあります。一人ひとりの存在や、互いの関係性が何よりも大切にされるこの場所で日々を過ごす若者やスタッフの声を紹介します。

※オルタナティブ：「もう一つの」「非伝統的な」「代わりの」などの意

NEWS

各地の動きをご紹介します。

●東ティモール駐日特命大使が来熊 —熊本YMCA

9月16～18日、熊本YMCAに東ティモール駐日特命大使であるイジリオコエーリヨさんをお招きしました。これは、アジア太平洋YMCA同盟が支援重点国として10年前より東ティモールと関わり、混乱期にも日本から職員を派遣していたこと、そして、2012年より4度にわたり熊本YMCAが東ティモールへスタッフの派遣や受け入れ、サッカーによる子どもたちの交流、指導者育成などの支援活動を行ってきたことによります。昨年は、東ティモールのスタッフが熊本市の小学校を訪問しました。東ティモールの現状を子どもたちに伝えることで、平和を創り出すことの意味や、これから何をなすべきかなどについて考える機会となり、参加者はお互いを理解することの大切さを実感しました。

今回のイジリオ大使来熊に際し、阿蘇YMCAで歓迎会を行い、阿蘇永草保育園園児による虎舞を披露して日本の文化を伝えました。また、日本YMCA同盟より東ティモールに派遣された職員とリーダーの熱い想いを報告しました。歓迎会には、アジア太平洋YMCA同盟総主事の山田公平氏や阿蘇市長の佐藤義興氏にもご参加いただき、歓談の時を持ちましたが、大使はとても気さくな方で、日本語も上手に話されていました。熊本YMCAのボードメンバーと東ティモールとの距離も一気に縮まり、東ティモールスタディーツアーを企画してほしいとの声も上がりました。

さらに、YMCA体育英語幼児園の訪問や、熊本の市立小学校2校の訪問、蒲島郁夫熊本県知事、幸山政史熊本市長へそれぞれ表敬訪問を行い、大使より東ティモールの紹介、県庁や市役所では、産業や環境などについての意見交換も行われました。



観覧した虎舞を披露してイジリオ大使を元気に歓迎

大使は阿蘇の自然、熊本の産業、街並みにも興味を示され、今後、東ティモールと熊本の子もたちや青少年の交流を行っていききたいとの感想を語られました。熊本YMCAとしても、子どもたちのサッカー交流を通して、平和を創り出す人材育成の一助に関わりを持っていきたいと考えています。(熊本YMCA 神保 勝己)

●第42回全国学生YMCA 夏期ゼミナール開催 —日本YMCA同盟

9月12～15日、日本YMCA同盟国際青少年センター東山荘にて全国学生YMCA夏期ゼミナールが開催され、全国21大学から学生・OBOG・都市YMCAスタッフ・講師など85人が参加しました。今年も学生による運営委員会が企画・運営を担い「自分の世界に問い直せ～共同体の中の私～」というテーマのもと、共に学び語り、互いの生き方を問い掛け合いました。

前半は、深澤純子氏(ヒューマンサービスセンター事務局長)を講師に、新聞や雑誌などメディアの中で、男性と女性の描かれ方や向けられる視線などを分析し、身近にあるジェンダー(性差)に気付くワークショップを行いました。性別によるステレオタイプで人を判断してしまうのではなく、違いを認め対等な関係を作る大切さを考える機会となりました。

聖書研究は、「善いサマリヤ人のたとえ」(ルカによる福音書10章25-37節)を読み、学生YMCAのOBOG3人による発題をもとに、少人数で聖書の言葉と互いの思いを分かち合いました。なぜレビ人たちは逃げてしまったのか、隣人とは誰かなど自由に語り合い、多様な意見や解釈に触れながら聖書を読む面白さを体感しました。

宮台真司氏(社会学者、首都大学東京教授)による講演では、社会システム(制度)に依存している私たちが、3.11以降の世界を生き延びるための思想として「共同体の再生」が鍵となることを学びました。いわゆる「損得勘定」で生きるのではなく、直面する社会の課題に当事者意識を持ち、ファシリテーターとなることや、自分の内側から沸き上がる思いと力(内発性/内なる光)によって、自ら考え行動し、他者と生きることが求められているとの講師の言葉に、胸を熱くする参加者の姿もありました。

学生の若い感性と内発性を信じて、学生YMCAは、時代時代の暗闇にその内なる光を照らす動きを担ってきました。善いサマリヤ人のように「行って、あなたも同じようにしなさい」というイエスの言葉に従う学生YMCA運動の意義を再確認し、この出会いと学びをYMCAや大学での歩みにつなげていきたいと思います。

(日本YMCA同盟 森 小百合)



全国の学生YMCA・都市YMCAから総勢85人が参加

アジア・世界のYMCAから

◆貧しい女性のための機織りプログラム

—アフリカYMCA同盟



マダガスカルYMCAの機織りプログラム

最も貧しい国の一つといわれるマダガスカルにあるYMCAでは、貧困な環境に置かれている人びとを支援するための職業訓練プログラムがあります。

シャロラインさんとファファさんは、YMCAの職業訓練の機織りプログラムに参加する20代前半の女性です。以前は収入が少なく不安定な生活を送っていましたが、プログラムに参加してからは収入が安定し、今では子どもの教育費や将来のために貯金ができるまでになりました。「生活が安定したことによって、家族と過ごす時間が増え、将来への希望も増した」と二人は話します。

◆フィリピン台風被災地、緊急支援のその次のステップへ

—アジア太平洋YMCA同盟

昨年11月に発生した台風30号により、甚大な被害を受けたフィリピン・イロイロ島。5月上旬に現地のYMCAと協働で行われた復興支援ワークキャンプでは、被害を受けた学校の校舎や公共施設の修復を行いました。台風発生からまもなく1年が経過しますが、現地では物質的な復興から、村の人びとの生活再建や地域の活性化といった新たなステップへ歩みを進めています。

◆世界中のユースと共に活動する

チェンジエージェントとユースレップス

—世界YMCA同盟

現代はユースにおいても世界規模で失業、自殺、教育格差など、課題が山積し、ユースの活躍の場が減少しています。こうした中、世界のYMCAではチェンジエージェントとユースレップスというプロジェクトが始動しています。このプロジェクトは、世界のYMCAのユースと切磋琢磨しながら、①山積する諸課題を自ら解決する世界規模のユースの動きを生み出しつつ、それぞれが属するYMCAでも変化をもたらすこと、②より良い社会を築いていくこと、の2点が期待されています。

●上記トピックの詳細(月刊PDF)は、日本YMCA同盟HPの「世界のYMCA」のページよりご覧いただけます(一部、英語のみ)。 <http://www.ymcajapan.org/world/index.html>

●多文化共生わいわい祭り開催

—北九州YMCA

9月15日、北九州市に住む外国人と地域の日本人との交流を目的に、「多文化共生のまち」を目指す北九州市と(公財)北九州国際交流協会および北九州国際交流団体ネットワークの共催で「多文化共生わいわい祭り～小倉の街でアジア発見!」を実施しました。開催にあたっては、日本語学校の留学生が地域の方と交流する機会や子どもも大人も楽しめる場を創出することを視野に入れながら準備を進めました。



ベトナム留学生による華やかな民族舞踊のパフォーマンス

当日は、日本語学校の留学生とスタッフが中心となり、世界各国料理の提供、茶道体験、浴衣の着付け、伝承遊びなどの日本文化に触れるブース、民族衣装の着用体験、よさこいや和太鼓の演奏など、プログラム満載で学校関係者、地域住民の方々、北九州YMCAのキャンプ・体操・学童に通う子どもたちとその保護者など、約500人の方にご来場いただきました。

午後には、アジア・太平洋YMCA同盟総主事の山田公平氏による『アジアの現実～日本への期待～』というテーマでの講演もありました。

また、パートナーシップを結んでいる釜山YMCAからは、理事長と事務総長の各ご夫妻や理事の参加もありました。昨年度は、北九州から子ども16人、大人15人が釜山へ行って交流キャンプを行い、釜山YMCAの子どもたちと一緒に干し柿作りやホームステイを体験しましたが、当時受け入れを担当して下さった理事長や事務総長と1年ぶりの再会もでき、喜びの笑顔がはじけました。

留学生のみならず、外国人が異国で生活するのは容易でないこともたくさんあります。現に、北九州YMCAで学ぶ留学生も文化や習慣の違いから日々さまざまな問題に直面しています。だからこそ、お互いの文化や習慣の違いを認め、受け入れ、会話をすることが平和につながると信じ、これからも民間レベルでの国際交流プログラムを続けていきます。

(北九州YMCA 竹迫 英里)